

# 小林秀雄全集

## 第五卷



### ドストエフスキイの生活

ドストエフスキイの生活  
ドストエフスキイの時代感覚  
ハムレットとラスコオリニコフ

小林秀雄全集  
第五卷

ドストエフスキイの生活

新潮社版

小林秀雄全集第五卷

ドストエフスキイの生活



昭和四十二年八月二十日 發行  
昭和五十三年九月二十日 十刷

定價 三千六百圓

著者 小林秀雄

發行者 佐藤亮一

印刷者 塚田重

印刷所 塚田印刷株式會社

原色版印刷 半七寫眞工業株式會社  
寫眞版

製本所 新宿加藤製本株式會社

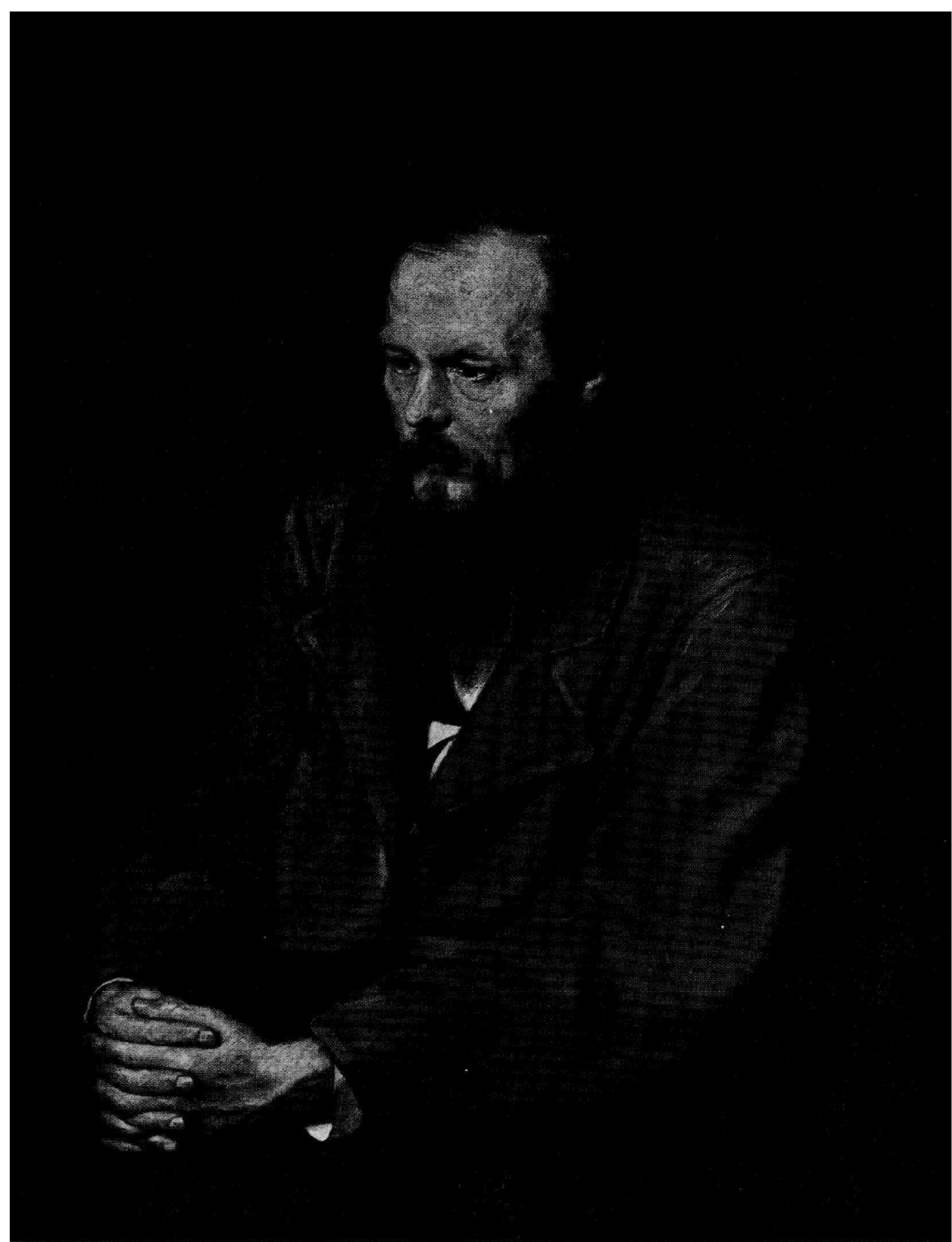
發行所 株式會社 新潮社

東京都新宿區矢來町七一

電話東京(266)五一一一(業務部)  
東京(266)五四一一(編集部)

振替東京四一八〇八番 郵便番號一六二

(亂丁・落丁本は、御面倒ですが本社通信係宛御送付  
下さい。送料小社負擔にてお取替へいたします。)



ペーロフ 《ドストエフスキイの肖像》



ド  
ス  
ト  
エ  
フ  
ス  
キ  
イ  
の  
生  
活

小  
林  
秀  
雄  
全  
集  
第  
五  
卷

編輯

大江岡  
中村昇  
藤光夫  
淳平

第五卷  
目次



## ドストエフスキイの生活

序 (歴史について) .....	二
1 處女作まで .....	三
2 ペトラシエフスキイ事件 .....	五
3 死人の家 .....	六
4 セミパラチンスク .....	七
5 「ヴレエミヤ」編輯者 .....	八
6 戀愛 .....	九
7 結婚・賭博 .....	一〇
8 ネチャアエフ事件 .....	一一
9 作家の日記 .....	一二
10 死 .....	一三
ドストエフスキイ對照略年譜 .....	一四

雑考

私信 ..... 一〇三

「ドストエフスキイの精神分析」 ..... 一〇五

J・M・マリイ「ドストエフスキイ」 ..... 一〇七

ドストエフスキイの時代感覺 ..... 一〇〇

「ドストエフスキイの生活」のこと ..... 一〇六

ドストエフスキイのこと ..... 一〇六

ハムレットとラスコオリニコフ ..... 一〇五

ドストエフスキイ七十五年祭に於ける講演 ..... 一〇三

ネヴァア河 ..... 一〇四

後記

解説 ..... 河上徹太郎 ..... 二六七

解題 ..... 吉田熈生 ..... 二六四



ド  
ス  
ト  
エ  
フ  
ス  
キ  
イ  
の  
生  
活

「病者の光學（見地）から、一段と健全な概念や價値を見て、  
又再び逆に、豊富な生命の充溢と自信とからデカダンス本能  
のひそやかな働きを見下すといふこと——これは私の最も長  
い練習、私に特有の經驗であつて、若し私が、何事かに於い  
て大家になつたとすれば、それはその點に於いてであつた」

——ニイチェ「この人を見よ」——

## 序 (歴史について)

### 1

例へば、かういふ言葉がある。「最後に、土くれが少しばかり、頭の上にはばら撒かれ、凡ては永久に過ぎ去る」と。當り前な事だと僕等は言ふ。だが、誰かは、それは確かパスカルの「レ・パンセ」のなかにある文句だ、と言ふだらう。當り前な事を當り前の人間が語つても始らないと見える。パスカルは當り前の事を言ふのに色々非凡な工夫を凝したに違ひない。そして確かに僕等は、彼の非凡な工夫に驚いてゐるので、彼の語る當り前な眞理に今更驚いてゐるのではない。驚いても始らぬと肝に銘じてゐるからだ。處で、又、パスカルがどんな工夫を廻らさうと、彼の工夫などには全く關係なく、凡ては永久に過ぎ去るといふ事は何か驚くべき事ではないのだらうか。

言葉を曖昧にしてゐるわけではない。歴史の問題は、まさしくかういふ人間の置かれた曖昧な事態のうちに生じ、これを抜け出る事が出来ずにゐるやうに思はれる。

### 2

凡ては永久に過ぎ去る。誰もこれを疑ふ事は出来ないが、疑ふ振りをする事は出来る。いや何一つ過ぎ去るものはない積りでゐる事が、取りも直さず僕等が生きてゐる事だとも言へる。積りでゐるの本當はさうではない。歴史は、この積りから生れた。過ぎ去るものを、僕等は捕へて置かうと希つた。そしてこの亂暴な希ひが、さう巧く成功しない事は見易い理である。

例へば、僕等はパスカルの言葉を保存した、眞理としてではなく歴史として。眞理としても保存されてゐる様に見えるが、それは僕等が保存しようとして希つた結果ではない。言はばひとりでに残つたのだ。單に自然は依然として過ぎ去る事を止めないからである。

自然は人間には關係なく在るものだが、人間が作り出さなければ歴史はない。歴史は人間とともに始り人間とともに終る、と言はれるが、この事は徹底して考へる必要がある。

有史以來とか有史以前とか言ふが、一體そこに本質的な區別が在るのだらうか。だが、かういふ質問自體がかなり拙劣なものである。地球上に人類が現れた事が、自然にとつて一偶然事に過ぎないならば、自然は、人間の手で附けられた様々な痕跡を、例へば氷河の附けた痕跡とか、貝殻のつけた痕跡とかと區別する術を知らないに相違ない。地球が人類その他の生物を乗せてゐるのも暫くの間だ。その暫くの爲に、自然が、その機制を變へるとは誰も考へやしない。さういふ自然の世界に、自然科学的精神といふ人間の一能力が對應する。そしてこの一能力は、その純粹な形に於いては、出来るだけ人間臭を脱した「自然常數」の確立を目指さざるを得ない事は言ふ迄もない。この言はば人間が自ら嚴密な一尺度と化する能力は、自然が僕等に強ひたのかも知れぬ。限りなく擴り、限りなく打續く、眺めてゐる限り取り附く島もない様に見える自然に對し、僕等が取つた自己防衛の精鍊された一手段である。だが、歴史は僕等に何を強ひるのか、若し僕等が作らなければ歴史はないならば。

自然は疑ひもなく僕等の外部に在る。少くとも、自然とは、これを一對象として僕等の精神から切

離さなければ考へられないある物だ。だが、歴史が僕等の外部に在るといふ事が言へるだらうか。僕等は史料のない處に歴史を認め得ない。そして史料とは、その在るが儘の姿では、悉く物質である。それは人間によつて蒙つた自然の傷に過ぎず、傷たる限り、自然とは、別様の運命を辿り得ない。自然は傷を癒さうとするのに人間の手を借りやしない。岩石が風化を受ける様に、史料は絶えず湮滅してゐる。湮滅が人間の手で早められるとすれば、それは自然にとつては勿怪の幸ひに過ぎまい。さういふ在るが儘の史料といふものが、自然としてしか在り様がないならば、其處に自然ではなく歴史を讀むのは、無論僕等の能力如何にだけ關係する。そしてこの能力は、史料といふ言葉を發明した能力と同一である他はあるまい。この能力には史料を自然の破片として感ずる事が出来ないものである。それなら、史料を自然の破片と観ずるもう一つの能力に對する或る能力があるわけで、古寺の瓦を手にする人間は、その重さを積る一方、そこに人間の姿を想ひ描く二重人なのである。

この二つの能力は、つまり人間を自然化しようとする能力と自然を人間化しようとする能力は、僕等の裡で、成る程離し難く混合してゐるが、假りに、と言ふのはこの文章の技術上、こゝに區別して考へて見てゐるわけだが、この二つは全く逆の方向に働いてゐるばかりではなく、その性質も似てゐない。それぞれの性質を誇張してみればよい。自然は僕等に疎遠になればなる程、僕等の理解に好都合な世界として現れる。別言すれば、僕等は外物による檢證の段階を踏み、眞理とは何物かを知らないとしても、少くとも檢證に堪へない物は除き得る眞理の世界を、自然に對應させるに至る。この世界の支へは言葉ではないのだ。

だが、これに反し、自然を人間化する能力は、言はば生き物が生き物を求める欲望に根ざす、本質的に曖昧な力である。無論これは非合理的な力であり、自然は元來人間化なぞに應ずるものではない。従つて人間化された自然とは、その純粹な形では、神話に他ならず、言ひ換へれば僕等の言葉に



支へられた世界である。

歴史は神話である。史料の物質性によつて多かれ少かれ限定を受けざるを得ない神話だ。歴史は歴史といふ言葉に支へられた世界であつて、歴史といふ存在が、それを支へてゐるのではない。凡そ存在するものは、人間もその一部として、僕等は自然としか考へ得ないのだし、自然を人間化する僕等の能力は、言はば存在しないものに關する能力であり、史料とはこの能力が自ら感ずる自然の抵抗に他ならない。抵抗さへ感じなければ、この能力には何んでも可能だ。例へば僕等は織田信長の友人だつたらと想像するのと同じ氣樂さで、若し氷河時代に生れてゐたらと想像する。望むならば天地開闢の仕事に立會ふ事も出来る。實際かういふ想像力の働かない處では、歴史はその形骸を曝すだけである。

外物の檢證によつて次第に眞理の世界を築いて行く能力にとつては、自然への屈從こそ、その絶對の條件のだが、言ひ換へれば、自然への屈從によつて、自然の認識はその純粹を期するのであるが、歴史の認識はどうしても純粹な姿を取り得ない。言はば歴史を觀察する條件は、又これを創り出す條件に他ならぬといふ様な不安定な場所で、僕等は歴史といふ言葉を發明する。生き物が生き物を求める欲求は、自然の姿が明らかになるにつれて、到る處で史料といふ抵抗物に出會ふわけだが、欲求の力は、抵抗物に單純に屈從してはゐない。この力にとつて、外物の檢證は、歴史の世界を創つて行く上で、消極的な條件に過ぎないので、どんなに史料が豊富になつても、その網の目のなかで僕等の想像力は、どこまでも自由であらうとするだらう。

僕等の日常の生命が、いつも外物の抵抗を感じて生きてゐる限り、歴史にあつても同じ事だ。既に土に化した人々を蘇生させたいといふ僕等の希ひと、彼等が自然の裡に遺した足跡との間に微妙な釣合ひが出来上る。この釣合ひのなかで行はれる仕事に、歴史常數といふもの（さういふ言葉が使へる